資料４

提供資料　　2023 矢作川感謝祭（9/10）参観レポート

野田賢司

１　はじめに

2023（令和 5）年 9 月 10 日、矢作川中流の本川河畔で「2023 矢作川感謝祭」が開催された。このイベントは第 63 回川部会で案内頂いた流域連携イベントの一つでもあり、筆者は感染症対策に配慮してとても久しぶりに矢作川中流の現地を参観した。当日は、雷雨性の雨模様であったが、当感謝祭の十八番である「豊田大橋下」（いわゆる軒下）という場所での開催で、主催者らと車で来場された参加者に問題はなかったようである。豊田市駅から徒歩アプローチされた参加者の一部は瑞々しい状態になった以外は。

２　参観結果

筆者も豊田市駅から会場に徒歩アプローチした一人であった。この東西ルートを横の軸にして豊田市街地の中心地、すなわちメインと公共交通機関と矢作川本川（リバーフロント整備（保全・利用）ゾーン、水辺緑地景観域）との三次元的な位置関係を視覚的に図 1 に示した。縦の軸は川の流れで、流水とその河床の中を生きものと人が時々の水環境と多様性を紡いでいる。写真記録を整理して、当日の参観概況を以下に示した。

写真 1　矢作川右岸堤防。名鉄豊田市駅から東方にこの位置まで 0.78km、徒歩 5.21km/時で 9 分。堤防天端縁に矢作川 Yahagigawa 名称表記板。脇には河川・河川敷公園モニターカメラも有る。

写真 2　豊田大橋歩道側（欄干西端）に設置されている地図・施設案内サイン。日本語、英語、ポルトガル語、韓国語、中国語の 4 箇国語で表記。左の地図で、矢作川 Yhagi River と標記。

写真 3　豊田大橋下の右岸河川敷、在留外国人（ブラジル系市民）らが集うイベント・交流広場で、下流側に手洗いコーナーもあって便利。(豊田大橋歩道側の階段上から豊田スタジアム方向)

写真 4　同左、ライブステージ、売店、フリマ等若者・カップル・家族・子供たちで賑わう。ゴミ無く、きれいに河川敷を利用。気かつけば、邦人は 1 人だけ（レアな私）。Rio Yhagi！

（国土地理院地図データから作成）

図１　矢作川感謝祭会場の位置と周辺、東西の地形断面

写真 5　豊田大橋中央付近から下流方向に俯瞰した矢作川の景観。流れは定常。穏やかで澄んだ流れ（清流）。

右岸側は水平の高水敷から低水敷きに緩やかな勾配で移行し、辺りに立木が散在する。親水性が高い岸に整備されている。河床は浅い平瀬で、中にアユ釣り人がいる。

写真 6　同左、左岸寄りは中州で、島状に草本類が生える。左岸側の河川敷は、水辺を高木・亜高木など階層構造の河畔林が連なる。

岸は根固め石積が列状に整備されている。右岸と対照的に直線であるが、ヤナギなど林縁植生が被って見え隠れし水面の動きと緑の連続に違和感が少ない。

写真 7　河川内の橋脚上（橋梁下、写真 9 の後方参照）から、左岸側高水敷の本会場「矢作川感謝祭」の中央部の俯瞰。親水階段の近くが仮設ステージ（裏側）。

写真 8　豊田大橋から左岸の高水敷に降りてみた「矢作川感謝祭」会場の様子。橋下の中央がメイン会場で、両サイドには大小の白色系テントが幾張りか建てられてあった。

写真 9　ステージ：プログラムが、対岸のサウンドにも負けないように、エネルギッシュ、カラフルに展開。終盤は、矢作川おどり（本番前に会場にいる老若男女に声をかけて、ダンスをレッスンしているところ）。

写真 10　矢作川流域圏懇談会の PR ブース

矢作川に棲むさなかの切貼り模型やパンフレットのプレゼント、矢作川クイズ、矢作川との絆のアンケート（パネル）など工夫を凝らした出展。事務局＆補佐の皆さまに感謝。

写真 11　出展：矢作川水族館の様子

会場中央に並べた 2 つの大型水槽に入れられた矢作川に棲む生きものたち。爬虫類、湛水魚類、軟甲類（カニ、エビ）など。

写真 12　出店：ブースの様子

定番、アユの塩焼き（奥矢作 小渡町 みのわ食堂さん）。

他に、食べもの（穀物・菓子類）、自然素材の工作、おもちゃ、衣類等々（詳細略）。

写真 13　出展：豊田森林塾の PR ブース

薪割り体験コーナー。各種の斧から自分に合った斧を使って一人当たり杉丸太 1 個を割る。体験にあたり、割る方法、安全作業をていねいにレクチャーしていただいた。割った結果も評価して頂けた。記憶によく残るブースであった。

写真 14　出店：自然農法推進活動グループの PR ブース（農作業用トラック）

矢作川流域の特徴であるマサ土を土壌にジャガイモの種を植え付ける体験コーナー。これば植え付けた後の状況。荷台に畑と旗。口述の解説で、とても便利なブースに感心させられた。

写真 15　海の水族館（三河湾の生きものたち）

矢作川水族館の横で東幡豆漁協の石川組合長（写真中央）が訪問者らに対応されていた。「海部会なので云々。」と出展のお世話に感謝。

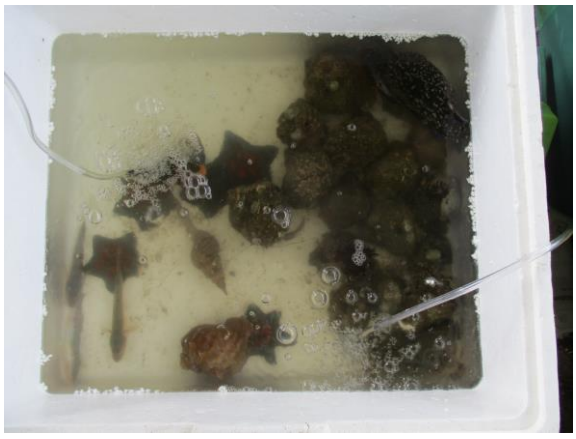

写真 16　同左、一つは底生動物の仮設生け簀（トロ箱）で、地元のトンボロ干潟で釣ったり採取したりしたハゼ、ヤドカリ（アカニシ殻を利用している）、タイワンガザミ（最近増えているとのこと）、およびヒトデなどが入っていた。

写真 17　内陸の市民には、特に海の生きものが珍しいらしく、思わず手に取って感触をおぼえる子どもの姿もあった。掴まれた魚介類の中には災難で白い腹を見せた個体もあった。

写真 18　会場近くの河畔林、小さな除草隊
子ヤギを利用した林床の除草が静かに披露されていた。木の幹にロープが固定されて、ロープ長の範囲の下草を食べ動いて除草する仕組み。

多くの出展ブースがあったが、紙数の関係で省略（イベントチラシや後日の新聞記事参照のこと）。最後に、「とよた森林学校」付き河畔林ミニツアー（14：00～14：30）：矢作川中流の河畔林について豊田市矢作川研究所の洲崎燈子主任研究員によるガイド兼解説を紹介しておく。

3　矢作川中流の河畔林ミニツアー

洲崎氏の案内で集まった参加市民 5 人が、会場から最寄りの河畔林のヤギ除草現場に行き、最初に（1）をレクチャーしていただいた。次に、樹冠下を散策するような形で現況の解説を聞きながら観察ウォーキングをした。途中で雷雨になったが、樹冠下は丁度都合の良い雨宿りの場所にもなった。

（1）過去から現在までの経過

昔は根が張る竹を河畔に植えて河岸を守り、河川の氾濫防止に役立てるとともに、竹材は多方面に利用して、一石二鳥であった。高度経済成長期以降、矢作川沿岸でも竹の利用がなくなると、竹林が暴れて繁茂する状況が進行し、河畔植生が大きく変わってしまった。この状況を憂う市民が集い、市民の河川利用と景観のよい河畔林を目指してコツコツと修復に取り組んでいる。その先駆けが「NPO 法人矢作川森林塾（硲 代表）」である（河川協力団体として登録されている）。当会は「老人から子どもまでが憩える河畔の都市林とせせらぎを」をモットーにして、竹木伐採、新竹の除去、除草・清掃作業、魚層整備、高校生のフィールドワークへの協力など、河畔を美化・環境整備する活動を推進している（国土交通省豊橋河川事務所情報）。その後は、豊田市内で各地に結成された沿岸の河川愛護会が河畔林整備に協力している。

（2）修復された現在の河畔林の状況

写真 19　矢作川の河畔林について解説（中央）

写真 20　自生樹の一つ、マユミ

写真 21　ヤブツバキ（他にヤマグワなど）

写真 22　ムクノキ

写真 23　エノキ（背後と後方）

(3) まとめ

生態系の話も含めながら流暢で尽きなく興味深い内容のガイドで、蒸し暑い雷雨下も忘れるほどであった。参加者が少なかったのは残念であった。河畔林も工夫次第で滞在型地域観光・河川利用・環境教育にと、新ジャンルを提供してくれそうである。雷雨が去るころ出だしのヤギ除草現場に戻り、参加市民らは洲崎氏に感謝してひと時のミニツアーを終えた。

5　おわりに

矢作川を見たひと時でした。参加者、ひと時を楽しんだ人々、様々に水辺でこの日ふれ合った大勢のひとびと、私を含めて改めて言いたいこと。一先ずは「か・ん・しゃ」です。上（山）に向かって、水底（里川）に向かって、下（海）に向かって。そして、また雷雨にも感謝です。明日も、明後日も、それが心底から言えるように。お疲れさまでした。

（2023.10.1 稿）